

読書

議論好きなきなインド人

アマルティア・セン著

一九五七年の国連常任理事争いでのこと。インド代表のクリシュナ・メーノーンの演説は延々と九時間にも及び、その記録はいまだに破られていないそうだ。「経済学者」の肩書きを過ぎ去りに、センはこの多弁性の源流を求めて千年の悠久を一気に駆け抜け、インドの古典文学の世界へと読者を引き込んでしまう。議論の伝統は民主主義と結合することで飢饉の防止や医療の充実といった具体的問題の解決に役立ってきた、とセンはいう。

その証拠に、野党とメディア活動の盛んなインドでは一九四三年以来、飢饉が生じていないが、経済的に上位にあった一九六〇年代初期の中国は死者数千万の飢饉を防止できなかった。

議論の豊かさは多元的な価値によって担保される。しかし、議論の前提が画一化すると前に進めなくなる。民族対立の際に持ち出されるムスリムやクリスチャンといった単一的アイデンティティーの



議論好きなきな
インド人

(佐藤宏・栗原利江訳、明石書店・三、八〇〇円)

▼著者はインド生まれのノーベル賞受賞経済学者。

民主主義支える異端と多様性

押し付けはその例である。実は「独自の文化」と思われているものには少なからず「外来」が刷り込まれており、「一つの文化」の内部には抱え切れないほどの多様性がある。西洋対東洋といった表面的な対照性の強調は、かえっておのおの分類の内部にある多様性を隠蔽し、共通項への視野を閉ざす。

例えば、「ヒンズー教国」と称されることの多いインドのムスリム人口は世界第二位である。対照性ではなく、その奥に潜む共通の糸をつむぎだすのがセン「歴史学の真骨頂といえよう」。

特に印象的なのは、「異端」の地位に押しとどめられてきたような「マイナーな」立場でさえも、議論の地平の中で忘れられることなく生き続け、民主主義の底辺を支えてきたという指摘である。異端の位置づけと多様性への寛容を民主主義の根幹に見据える本書のメッセージは、いじめや政治不信といった問題にさいなまれる日本の私たちにも切実に響く。目先の知識がもてはやされる今日の日本でこそ、結論が一つに決まらない議論の意味を考えたい。

センの祖父の日本訪問、タゴールとガンジーの思想的対立など、歴史の事実として興味をそそられる箇所も多い。この夏にじっくり向き合いたい一冊である。

東京大学准教授 佐藤 仁